

ドリルタイプの漢字学習から意味理解への学習 —白川文字学による教育の効果—

○吉田 甫 (立命館大学)
後藤文男 # (立命館大学)
萩原正樹 # (立命館大学)

川那部隆司 (立命館大学)
久保裕之 # (立命館大学)

キーワード：漢字学習，ドリルタイプ，意味理解

わが国における漢字教育は、基本的には、ドリル学習による暗記タイプの学習と言えるだろう。多くの子どもは、漢字帳に漢字をひたすら繰り返し書くというドリルを行い、暗記するというタイプの学習をおこなっている。そこには、漢字の持つ意味などを考える余地はほとんどない。しかし現在の漢字教育は、ほとんどこうしたドリルタイプに依存しているのが現状である。これに対し、福井県ではまったく独自の漢字教育をおこなっている。それは、白川文字学に基づく漢字教育である。白川文字学とは、現在の当用漢字を古代文字との関係で見直し、それらの関連性をつけることにより、漢字が持つ意味を浮かび上がらせる教育と言える。実際には、子どもに古代文字を提示し、それが現代ではどんな漢字になるかを自由に発想させ、漢字の成立過程などを知ることにより、漢字の構成を理解するという教育方法である。福井県では、この6～7年にわたり、小学校で白川文字学に基づいた漢字教育を継続している。

そこで、本研究では、白川文字学を実践している福井県から2つの小学校を選び、子どもが何を学習しているかを明らかにすることを目的とする。対照群として、隣の県である滋賀県からやはり2つの小学校を選び、どのような違いがあるかを検討した

方 法

参加者

福井県内の公立のA小学校4年生とB小学校の4年生 (N=130)、同じ2つの小学校の6年生 (N=136)、および滋賀県内の公立のC小学校とD小学校の4年生 (N=211) と6年生 (N=185) が、それぞれ対象となった。

課題

漢字の理解を調査するための問題として、以下のタイプの問題を構成した。(1) 漢字がもつ要素

を考慮して、その要素と漢字との関係を考える問題3問、(2) 未習の漢字の読みを問う問題8問、(3) 1つの漢字を基にして熟語を構成する問題10問、(4) 2文字から構成されている熟語の漢字の関係を問う問題8問、(5) 自由な書きを求める問題

手続き

国語の1単位時間45分で一斉の調査

結 果

4年生と6年生それぞれで、それぞれの県内での2つの小学校の正答率には差がなかったので、2学校を統合した形で分析をおこなった。

(1) 全体の分析

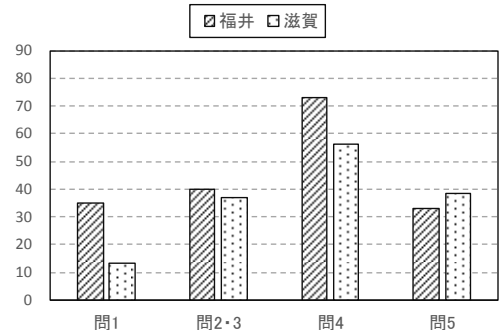


図1. 4年生における問題毎の正答率

4年生の結果は、図1に示されている。問1のタイプでは、白川文字学による教育を受けている福井の子どもが、滋賀県の子どもよりも正答率は、有意に高かった。問2では差がなかったが、問3の熟語の構成では福井の子どもが明らかに高い正答率を示した。問4では教育方法による差は見られなかった。

(2) レベル毎の分析

結果は4年と6年をそれぞれ能力レベル毎で分析した。上位層では、2つの県で差がないが、能力が下がるほど、達成度に差が見られた。